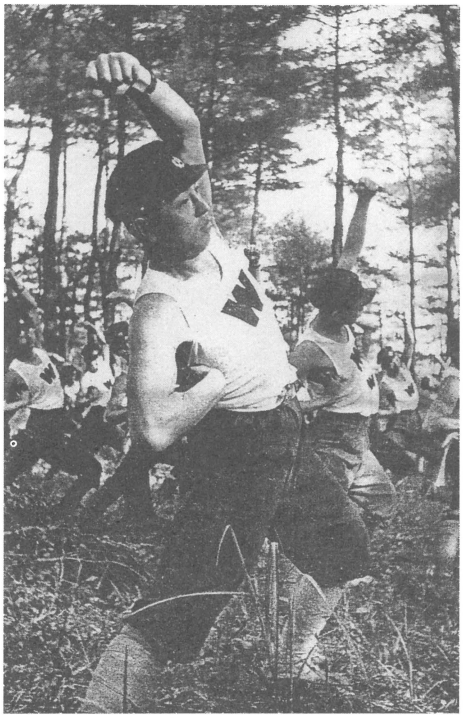
第9号
2003年3月

東久留米稲門会・会報

杜の西北

発行
早稲田大学東久留米稲門会

事務局　東京都東久留米市
下里1－11－8
電話　0424－75－5897
http://homepage2.nifty.com/35292/



久留米道場で、労作のあとの体操に励む
早稲田高等学院の学生

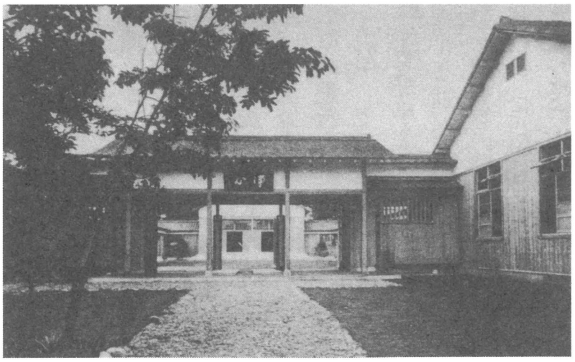
60年前、東久留米に
稲門人が残した足跡
「早稲田大学学徒錬成部・久留米道場」の史実を追う

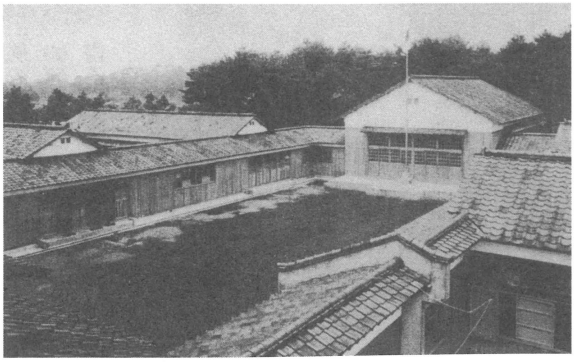
風化して、いまはなんの痕跡もない。60年の歳月のなかに消えてしまったのである。だがしかし、それは昭和15年から終戦直前まで、ごく短い寿命ながら、確実に存在した。「早稲田大学学徒錬成部・久留米道場」――。都の西北、早稲田の杜の、そのまた西北、東久留米の地に、戦時下の稲門人たちが残した足跡を、ここで振り返ってみたい。

西武・新宿線は戦前、村山線と呼ばれていたが、花小金井駅と小平駅の間には、もう一つ、東小平駅があった。いまの公立昭和病院から300メートル西に位置していたという。「早稲田大学学徒錬成部・久留米道場」に向かう学生たちは、この駅で下車、2キロ北へ歩いた。

それは現、滝山小付近にあった

東小平駅は昭和15年に開設され戦後、廃駅になっている。この駅は、久留米道場の建設が昭和15年秋に始まり、昭和16年5月実際の錬成が開始されるのを見つめ、さらには昭和20年5月戦争の激化とともに錬成実施が不可能となり錬成部が解散するのを静かに黙って見届け、この駅もまた消えていったのである。





久留米道場の正門（上）と“神殿風の建物”の講堂、寮（下）

初め、早稲田は勘違いして、この道場を「小平錬成道場」と名付けた。多分、道場にゆくのに東小平駅で降り、小平村の天神、大沼の集落を抜けて久留米に入ることからの錯覚だろう。しかしほどなく改称されて「久留米道場」となった。

東京府北多摩郡久留米村前沢字泉久保（都制導入は昭和18年）が当時の道場所在地。現在の東久留米市滝山4丁目、市立滝山小学校を中心としたエリアである。

早稲田大学が昭和18年4月出版した「学徒錬成」のなかに次のような道場紹介の一節がある。

「幾度か萬葉歌人に歌はれ、また近くは文豪独歩、蘆花等にこの上もなく愛でられた武蔵野、しかも狭山丘陵は指呼の間、多摩の清流また必ずしも遠からざる略ぼ武蔵野の中心、こゝ久留米村の一角、翠の松林を（次頁へ）

他の大学に率先、錬成事業

（前頁から）背景として、雑木林に取り囲まれた聖域に、見るからに清浄な感じのする神殿風の建物が建ってゐる。これこそ早稲田大学学徒錬成部の教職員が若き学徒と日夜寝食を共にし文字通り倶学倶進の錬成を行ふ久留米道場である…」

「東小平駅から物の十分も歩かない中に、久留米道場の国旗が木の間隠れに見えて来る。すでにして道場につくと武蔵野を流れる一条の清流があり、自然木を欄干にした小さな橋が懸ってゐる。この橋の辺りで隊伍を整へ、服装を正して先頭の班長の「歩調トレ」の号令一下、道場前の砂利道をザクザクと踏んで、玄関前に到着する。ふと玄関を見上げれば正面に『浄心』の額が掛ってゐる。総長自ら筆を執られて久留米道場の為にその本領を示されたものである。道場の域内に入ると、白木造りの神殿風の建物とそれを取繞る緑の林とは、自からにして浄域たることを感じせしめる…」

「神殿風の建物」というのは中庭を囲んだ講堂（56坪）、寮（166坪）、事務所（50坪）、食堂（55坪）、浴室（31坪）、廊下と門（76坪）などを指す。敷地は当初約9千坪だったが、その後、勤労耕作用地として隣接地を数度にわたって買い増しし最終的には2万5千坪余り（約8万2650平方メートル）を確保した。

昭和31年、久留米道場跡（白線部分）を上空から撮影。付近一帯は畠ばかり。東に南北に走る白い道路は小金井街道、南には拡幅前の新青梅街道が…

道場の定員は200名。第一、第二高等学院、専門部、高等師範部（いずれも旧制）などの学生がクラス毎に輪番で道場入りし、月曜から金曜までの4泊5日の錬成体験を行った。

ところで早稲田大学が学徒錬成事業に乗り出したのは、どのような理由からだろうか。

当時、国家総動員体制が強化されつつあったなか、田中穂積総長が欧米と比較してわが国の青年の体位低下が目立ち、しかも日本の教育に最も欠けているのが体育であることを痛感したのが起点となった。それが昭和15年秋、他の大学に率先して「学徒錬成部」を設置、田中総長自ら同部長を兼務することになったのだ。総長自身、学徒錬成部設置の趣旨をこう説明している。

「支那事変三周年を迎へて、聊か教育界の陳勝呉広（先駆けとなって）を以て任ずる意図に出でたものであって…わが邦の現代が最も痛切に要求するのは、道義の人実用の人であることは明らかであるが、兎角此の要求に合し難き憾ある所以のものは、畢竟教育上理論と実践とが分離して別々に取扱はれ、知を体得し知に徹底せざるためであって…其の欠点を補充する所のものは即ち錬成部の新設を措いて他に道なしと考えた」（「早稲田大学百年史」）

平たくいえば、現代の若ものもそうだが、当時の学生も頭でっかちで体力的、人間的に基礎的なものを身につけていない者が多く、「正しい箸の執り方も知らず正しい下駄の脱ぎ方を知らない学生、弊衣破帽蓬髪を以て自ら高しとし放歌高吟し側らに人無きが如き態度を以て東洋風の豪傑たりと錯覚せる学生が如何にして大東亜の指導者たり得るであろうか」（「学徒錬成」）

金	木	水	火	月
起床・点呼・清掃				
神拝・国旗掲揚・体錬				
朝食				
建学精神	錬成の本義	錬成	世界観	甘泉園集合
清掃	錬成教育原理	綜合	錬成教育原理	入所式
昼食				
退所式 高田馬場解散	労作体錬	綜合錬成	労作体錬	学徒礼法 労作体錬
国旗降納				
入浴				
夕食				
歓喜の夕	研究座談会			
神拝				
点呼・就寝				

久留米道場の日課表

といった大学側の危機感があったようだ。錬成のための道場は久留米を中心として、他に東伏見、戸塚、戸山、甘泉園にも設けている。

もっとも学徒錬成部の設置については学内で、すでに軍事教練が学生に課されているのにその上にまた錬成とは、といったリベラル派の反対も強かった。戦後編纂された「早稲田大学百年史」には、この学徒錬成部は「戦時下の徒花」として記述されている。

錬成は毎朝5時半の起床でスタート。神拝、国旗掲揚、体操のあと朝食、正午まで世界観や錬成教育原理、建学精神などの座学がある。「一、容姿は端正にして毅然たる態度を持すべし」「一、服装は質素清潔にして整然たるべし」などといった「学生十戒」をたたき込まれるのもこの時間だ。午後は木の伐採、堆肥づくり、肥汲みなどの労作や体操、夕方から夜には国旗降納、入浴、夕食、研究座談会とつづき午後9時半、点呼、就寝で1日が終わる。調理、食事のあと片付け、道場内全体の清掃など、生活に必要な課題はいっさい学生自身が行った。

「労作は辛いと思うのも束の間、すぐ休憩になって思う存分体を休めると、初めて経験する快さを感じた」という専門部学生。当稲門会の会員で昭和18年6月末、錬成を体験した竹村鋏郎さん（昭和23商）は、最近60年前を回想して「玉川上水沿いに多摩湖まで行軍したり、道場の早朝、近所の梨園の鶏の鳴く声を聞いたといった記憶があります。特別辛いとか、いやだったという思い出はまったくありませんね」と話している。

労作は木の伐採や根起こしなど（上）
食事前に全員が合掌（下）

いま、地元に追憶する人もなし

道場を受け入れた側の久留米村は、当時、人口6千人強。戸数千軒前後。この村の生え抜きの老いた畳職人が、昭和10年代をこんなふうに述懐したことがある。

「府中の親方のところに奉公に出て、久留米に帰って独立したんじゃが、まるで仕事がなかった。あのころの村の貧しさはひどくてな、畳のある家がめったになかった。みんなムシロか蒲（がま）を敷いてたんだ。仕事が出るようになったのは団地ができてからだよ」

多摩全体が、いや全国が似たような苦しい暮らしだったのだ。

そんななかだから久留米道場は〝神殿風の建物〟のようにみえたのである。久留米道場は村に屹立する存在だったのだろう。60年の歳月が経過したいま、地元で当時の道場を追憶する人もいないが、当時はいろんな声があったろう。

昭和20年3月久留米道場の一部は軍が接収。すでにこのころには学生の召集、工場への勤労動員がひどくなり、錬成する学生そのものがいなくなった。学徒錬成部は同年4月末廃止が決まった。

昭和46年当時、残っていた久留米道場の国旗掲揚台（上）と手洗場（下）

戦後、道場敷地は自作農特措法で一部を手放し、残りは食品会社などへ売却。建物は解体して第一高等学院に移築した。

前出の竹村さんは昭和43年に東久留米市に居を構え、46年に有刺鉄線で囲まれた久留米道場跡を訪ねて国旗掲揚台など、まだかすかに残っていた〝つわものどもの夢の跡〟を写真撮影した。それもほどなく撤去され、いまはいっさい跡形なく、道場は歴史の彼方に消え去っている。

第15代 早大総長に 白井克彦氏

奥島孝康前総長の任期満了にともなう総長選挙は昨年6月実施され、白井克彦理工学部教授＝**写真**＝が津本信博教育学部教授を抑えて選出され、11月5日第15代総長に就任した。

白井総長は昭和38年第一理工学部卒。同大学院理工学研究科博士課程を経て43年理工学部専任講師、45年助教授、50年教授。その後事務システムセンター所長、教務部長、国際交流センター所長などを歴任、平成10年常任理事。63歳。

アジア太平洋地域における早稲田大学のプレゼンスを確立、拡大し、国際的教養人の養成、知的プロフェショナルの育成、産学連携の研究体制の充実の三本柱の推進を図るとしている。

とりわけ注目されるのは所沢キャンパスの再編。スポーツ科学科からビジネス、医学を含めた総合的なスポーツ問題に取り組むスポーツ科学部へ発展させ、海外研究機関、医大などとも積極的な交流を進める計画だ。

よしなしごと
―いのちひとつ―
榎本名誉教授の講演要旨

昨年4月の定時総会に先立つ講演会には早大名誉教授の榎本隆司先生にご講演をお願いいたしました。その要約を先生ご自身がまとめられましたので、ここに掲載いたします。

❊　❊　❊

「よのなかにたえてさくらのなかりせばはるのこころはのどけからまし」（業平）―古来、日本を代表するこの花に託していろいろな物語が生まれている。小野小町…、林芙美子、井伏鱒二、そして「花も嵐も…」の「愛染かつら」に及んで―。

「柳は緑、花は紅」ということばは、変わらぬ自然の理法を伝えているが、対してわれわれの日常、人事の世界のいかに多事であることか。だからまた人は、自然を求め、旅にも出る。「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人やまつらん」―世を捨てて月を友とし自然を生きた西行。しかも都の人々への思いも断ちがたい。そのアンビバレンツのゆえにまた人間としての魅力も認められるのだが、その原点は、ひとつのいのちをどう生きるかという問題につながる。

いのちの原点は母親のおなかの中。その母を知らない室生犀星は、「無飾の純粋」を生きた母親のおもかげを追って『かげろふの日記遺文』を書いた。パンなくしては生きられない人間だが、つまらぬごまかしや飾りを斥けて純一に生きる―「身をえうなきもの」に思いなした『伊勢物語』の一行や、俗を出て画や詩の虚の世界を求める『草枕』（漱石）の主人公たちが思い合わされる。

漱石の友人正岡子規は、「病床六尺」に呻吟しつついのちの限りに処した。同じ日露戦争前夜、柳田国男は漂い寄った椰子の実を「遊海島記」にとらえ平和を願ったが、その材を借りて島崎藤村の「椰子の実」一編が生まれる。柳田の願いは一九四五年の敗戦まで叶えられなかったが、その戦争の悪を告発した五味川純平は、ソ満国境警備隊一五八人中四人が生き残った、その一人である。彼は、癌で逝った妻のいのちにおのれをかけた。戦争の惨禍を、井伏は、結婚というごく日常的な娘の幸せを守る思いで『黒い雨』に書き残している。

芹沢光治良文学愛好会に招かれて「死者との対話」を取り上げ、そこに、若き特攻隊員のいのちを奪ったものへの憤りや悼みがないことを批判して物議をかもしたが、一方で、同じ会員の一人が、六十歳にして美しく明日を生きたいと思う随筆に感動する。「明日」とは明るい日のことである。その明るい日を生きるために、自分だけの、たったひとつのいのちを、自由に、磨き鍛え、たのしく、豊かに生きたい。

「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」―一歩一歩におのれのいのちを自覚しながら生きている、最後の道を行く西行の姿がしのばれる。うん十うん歳になった今、あと何年生きられるかと思う。何年生きられるにしても、この日常にあって、名利を求め実を追うことには限りがある。金を欲し、うまいものを求めても、経験出来ることは知れている。だからこそわれわれは、実に対する虚の世界に夢を広げたいと望み、そこに自らの、たったひとつのいのちの拠りどころを見出したいと思うのである。老来、身の丈は縮むばかりである。是非ない。しかし、それゆえにこそ、せめて、心の丈だけは、一センチでも二センチでも大きくしていきたいと、願い、心するのである。

特別寄稿

トホホの陶芸

三田（さんだ）　三（みつ）

20年ほど前からやきものに惹かれるようになった。やきもの好きの目線は次第に時代を経たもの、古いものに移りやすい。そして手許に集まったのは見事なばかりの駄物と贋物。

そんな一昨年の春、市の広報紙で陶芸教室の欠員募集を見つけ、よし今度は自分でつくってみようと早速入会させて貰った。

土は地球創成期の火成岩が長い年月の間に風化され、粉砕されて微粒子になったもの、その中で可塑性に富んだ土を水で練って粘土とし、生活に役立つ形に成型して火を加えると土は再び元の岩石に還る。これが陶芸の原点と聞くと何となくロマンさえ感じられて楽しい。また粘土遊びは古稀近い男にも童心を甦らせてくれる。

造形した粘土は暫く置くと中の水分が蒸発して適度な固さとなり、削り、彫刻、貼付、象嵌などいろいろな細工が可能となる。5、6日置くとコチコチになり、これを素焼きにした後、ガラス状に溶けやすい成分を混ぜた釉薬を掛け、1250度前後で本焼きすれば一応陶器らしきものは出来上がる。

この釉薬に微量の鉄、銅、コバルトなどの金属を加えると焼成時の熱量、時間、酸化か還元かの焼き方によって金属は様々に化学変化して発色するが、ここは化学と炎が複雑に絡みあって演出する舞台で素人の介入はまず受け付けてくれない。

造型、彫刻、絵付けなど多様な技術と感性が問われ、最後は専門家でも炎に祈るという恐ろしく奥深い世界だということだけは判ってきた。

よく土練り三年、轆轤十年などといわれるが先行き長くない男にそんな悠長な時間はない。いきおい何もかも未熟なまま窯に放り込むことになる。こんな新参者にいきなり祈られても炎は当惑するらしく期待とは似ても似つかぬ姿の作品がお出ましになる。

それでも機械が自動成型し、プリントで絵付けされた量産品と違い、こちらは世に二つとない代物。不格好でも自作の徳利と盃で酌む酒の味はまた格別と一人で納得し、慰めている。

（昭和33政経）

わが早稲田時代

Communication Tool としての英語の音に魅せられた時代

《使える英語勉強のためのヒントです》

森　冨士雄

人生には節目毎に大切な人との出会いがあるものです。私の場合、その中のお一人は当時商学部の部長をなされていた中島正信教授です。在学中のある日、中島部長教授に学部長室で個人的にお会いする機会がありました。〝商学部の当面の目標は国際社会で活躍できる人材を世に送り出す事である。その意識を強く持って生きて欲しい〟と言われた事をなつかしく覚えています。大変に親分肌的部分を持っておられた教授でしたから、私はすっかりその気にさせられ、卒業後約40年にわたり北米文化、北米企業との関りを持ちながら英語圏で生きました。変化に、そしてチャレンジに富む年月を送らせて頂き本当に感謝しています。

現役生活に一区切りをつけた今、この経験から学んだものがあるとすれば、それは何か、それを社会に御恩返しする方法、機会はないものか模索しているところです。具体的には、伝えるべきものは〝異文化コミュニケーションのための道具としての英語〟を学ぶ秘訣のようなものだと思うのです。

今、日本では英語学習ブームですが、私にはテレビ、ラジオ等での英語の（特に日常英会話なるもの）教え方、習い方が間違った方向に進んでいると思われます。過日NHKのテレビ放送を見てびっくりした事があります。日本の中学生数人が（学校の先生による指導の下にです）街頭で見ず知らずの外国人旅行者にいきなり"What's your name?"と大声で呼び掛ける場面でした。しかもその様子を物陰から先生らしき人が見ていて、授業の成果がありましたと喜んでいるのです。私は目を耳を疑いました。旅行者達も何が起こっているのか把握できず、あきれた様子で立ちつくしていました。英語圏での常識では有り得ない情景です。こんな失礼な言い方、そしてある意味危険な行為は英語圏では幼児でもしません。このような場面をNHK教育テレビで放送するとは。これは何を意味するのでしょうか。

私は（日本語で考え、それを英訳するという）日本の英語教育方式には改めないといけない点がいくつかあると考えます。

①何のために英語を学ぶのか、その目的を明確に規定していないか、目的が読み書きに偏っていること。

②その英語が使われるであろう場所、場面の文化的側面（議論の進め方、物事の考え方）についての教育を同時に進める必要性が認識されていない。

③言葉の原点は〝音〟であるのに、日本語にない音を聞き取り、発する筋肉トレイニングの必要性を無視している。

これらの要素を無視してプログラムを組むから教育現場では現実社会で全く使えない英語を何年も掛けて教え、教わるという悲しい結果になると考えます。

今日本の社会は企業社会だけでなく、あらゆる層で否応なく国際化をせまられています。私には〝国際化〟とはそれほど大袈裟なものとは思えません。人、国それぞれは考え方も、生き方も違うものだと認識し、お互いの立場を理解する事であり、其の為の道具が我々にとり必要な〝役立つ英語〟であると思います。大切な事は異国民が相互によりよくコミュニケートできるように先ず基本的な道具となるレベルの英語を学校で教え、それをたえまなく磨く必要がある事を認識させることであると思います。このため早稲田大学と我々稲門生が何等かの形で社会に貢献できないでしょうか。皆さんのご意見を伺いたいと思います。

（昭和35商）

坪内博士記念演劇博物館前で学友と。
円内は現在の森氏

勝村建設株式会社
副社長　市川英雄
（昭和33政経）

損害保険・生命保険代理店
有限会社　ハーモ企画
本社　中央区京橋2-9-12日本工築館7F
連絡事務所　東久留米市下里1-11-8
☎042-475-5897

小回りの利く
スピーディな〝街の印刷店〟
清文堂印刷所
東久留米市滝山五-一一-四
電話　〇四二四(七四)一七八七

うなぎ　天ぷら
たか川
東久留米市金山町1-7-6
☎0424-74-4561

もうひとつ、新しい文化事業

会員5名が技師資格取得し、映写会事業へ進出

昨年11月9日、第1回の映写会を市立中央図書館で開催、作品は原作浅田次郎、主演高倉健の「鉄道員（ぽっぽや）」でした。

初めての当会会員による映写でしたが、なんのトラブルもなく素晴らしい映画会となりました。この映画会にあたっての宣伝はほとんどしなかったのですが、市民の人たちを含めた45人以上の入場者をかぞえて一般の人々の間でも大変に好評で、映画会は成功であったかと思います。

映画には人生の笑いと涙の感動の世界があります。できれば古い名画を上映し、若き日の思い出をそのなかに見出していただければと思っています。この映写会事業は、なんとか当会の主催で開催できないものかと考え、副会長の菱山房子さんが色々と調査を始めました。

16ミリ映画のフィルムは都立日比谷図書館が多数所蔵していること、映写技師の資格は各自治体で講習会とテストを受けて取得すること、また16ミリ映写技師資格を所持していると16ミリフィルムの貸出を自由に受けられること、かつ映画会を開くことができることなどが分かりました。さいわいなことに東久留米市には視聴覚室があり、映写会を開催する会場もありました。

帆角、松崎（博）、森田各氏は昨年7月東久留米市で、また高橋（勤）氏は昨年5月練馬区で、佐々木氏は2年前に小平市でそれぞれ映写技師の資格を取得しました。

当稲門会ではこの映画会を年に何回か定期的に開催していくよう企画しています。

話題作「鉄道員（ぽっぽや）」のポスター

聞き手に市民増加
東久留米雑学塾

一昨年10月開講した東久留米雑学塾は、今年2月で8回を数えるまでになりました。徐々に市民にも知られ、毎回30名以上の方が参加され、熱心に講師の話に聞き入っています。今年も2ヶ月単位で開催しますので是非ご参加ください。講演録も実費で配布しております。事務局にお問い合わせください。

昨年6月以降開催の雑学塾の演題と講師は次の通りです。

○第4回　14年6月2日
演題「損害賠償あれこれ
—最近の裁判事例から」
講師　泉 信吾氏（弁護士）

○第5回　14年8月4日
演題「わがまち東久留米の残すべき原風景と残せる可能性」
講師　佐藤 雄二氏（当会員）

○第6回　14年10月6日
演題「わたしの日本人論①
イチロー選手とグローバリズム」
講師　國米家己三氏（顧問）

○第7回　14年12月1日
演題「わたしの日本人論②
〝草食文化〟という視点」
講師　國米家己三氏（顧問）

○第8回　15年2月2日
演題「山と酒を愛した牧水と山頭火」
講師　竹村鋭郎氏（当会員）

アクセス数4000超
東稲のホームページ

当稲門会の情報がいつでも、どこでも、だれでも即座に得られる発信基地としての役割を担当するのがホームページです。またそのホームページを探し出すためには、たとえホームページの登録番号を覚えていなくても思いつく関連情報を入力することによって容易に、かつ即座にたどり着くことができ、いまや情報検索の大変便利な道具になっています。開設以来1年2カ月、↗

東稲ホームページの表紙

↘アクセス数は4000を越えました。皆様のご意見を十分反映させ、つねに新鮮で魅力に富むホームページをこれからも維持したいと思います。皆様からの記事、映像情報の提供をお待ちしています。

（松崎　博）

進化つづける部会活動

俳句部会

句力向上に 吟行強化へ

昨年は、春・稲荷山公園桜祭り吟行、秋・鬼怒川温泉1泊の龍王峡吟行で、年8回の句会のなか写生句に心情句に成果があがったと思う。

これは属目―目をつけてよく見ることの効用であると思う。句力向上にも日帰り吟行を今年はふやしたいと計画している。

会員もふえ、紙面の部合で一句だけだが、個人別秀句を選ばせてもらった。（橘　正治・選）

会員も増え、熱気みなぎる句会

平成15年度　個人別秀句

雪解けや宿の親爺の大欠伸
安宅武一（昭28商）

片恋の遠き思い出沈丁花
河村洋子（昭41教）

さんざめく人の頭上や花万朶
坂本信太郎（名誉教授）

春深く心のままに歩きけり
棚野愛子（昭34文）

銀髪の神父の襟や天道虫
太田蔵之助（千雪）（昭23商）

噴水をもうひと回り車椅子
比護喜一郎（昭37商）

雲の峰備前瓦の蔵屋敷
松田博雄（昭28政経）

岩を抱く走り根濡らし霧の雨
三田三（畔巣）（昭33政経）

水澄むや千古の渓の岩畳
桜庭明（昭28政経）

山々の谷より煙る秋黴雨（あきついり）
馬場清彦（昭28法）

沢の音遠くに聞いて秋海棠（しゅうかいどう）
本間信一（昭24理工）

水澄みて淵にひらめく魚影あり
橘優治（昭41商）

新涼や寝返りし子の白き蹠（あし）
神田尚計（昭32政経）

新蕎麦（そば）や見知らぬ人と語り合い
高橋貞一（貞真）（昭26法）

朝日影石に震うる冬の蝶
高橋勤（昭36法）

一湾をつつみ蜜柑の山の照る
橘正治（雅契）（昭29文）

竹林の道に冬めく風を聞く
杉本達夫（文学部教授）

冬めくや東寺の塔の影長し
大久保泰司（昭30法）

わが古家も化粧直しか年の暮れ
大川洋子（浩仙）（昭29文）

年の瀬や子らが囲める研ぎ師あり
高塩和己（昭28商）

■俳句部会の今年度句会予定

3月23日(日)、4月20日(日)、5月18日(日)、7月23日(祝)、9月21日(日)、11月16日(日)、12月21日(日)

なお4月句会、9月句会のどちらかに吟行予定。通常句会は、中央公民館2F学習室で行い、13時30分より17時まで。

郷土研究部会

水と緑を訪ねて

昨年は、東久留米七福神を巡って市内の中心となる5つのお寺の沿革や郷土とのつながりを学びました。

「郷土研究部会」といっても学習するだけの会ではありません。興味や関心のある史跡を探索したり、郷土の桜の下で酒を飲んだり、またバーベキューのできるところでは（清瀬市柳瀬川沿いなど）で遊び、たまには「郷土」に関する講演会などを企画しております。差し当たって今年は諸先輩の指導を仰ぎながら気候の穏やかな時期に「さいかち窪」「澤頭」「竹林公園」に水と緑を訪ねたいと思っています。

（高橋哲男）

東久留米市内の七福神巡り。浄牧院で

「投稿、お待ちしています」

東稲ニュース

東久留米稲門会発足と同時に発刊された会の情報紙「東稲通信」（葉書使用）は2001年9月、紙幅を拡大（A4判、6～8頁建）し、その名も改めて「東稲ニュース」として継承され、すでに第9号まで刊行されています。

「東稲ニュース」は会員相互の情報交換のための媒体で、全会員が発信し、全員が参加してつくることをモットーにしています。

会員リレーエッセイのコラム「噴水広場」では、これまで8名の会員に寄稿いただき愉快な、あるいは貴重な体験、思いを語っていただきました。会の活動報告や各部会の部員持ち回りによる部活動報告も掲載しています。会の行事、部会のイベント予告など随時報道することにしていますので積極的に参加され、余暇をエンジョイし会員相互の親交を深めて頂ければ幸いです。別途「会員の声」として身近な情報を載せるスペースも設けています。新たなコラムも随時採り入れていくつもりです。

本年より奇数月10日の発行、投稿締切りは前月（偶数月）25日となりました。「東稲ニュース」の継続、発展は皆様一人一人の投稿が頼りです。郵送、ファックス、e―メール、いずれでも結構です、どしどし発信、投稿くださるようお願いいたします。

（比護喜一郎）

各部会はマンネリ知らず

女性サークル部会
小江戸、川越を散策

秋晴れの11月15日（金）、女性サークル部会の会員8名が小江戸、川越の散策を楽しみました。

本川越駅から歩いて15分、徳川ゆかりの寺、喜多院に立ち寄りました。四方美しい紅葉に包まれ、折しも七五三のお祝いで目を楽しませてくれました。入り口一角に菊花展が催され、アートな菊の花に囲まれて秋を実感したものです。境内にある五百羅漢の人間味あふれた表情にも親しみを感じました。

再び街中に出て10分、大正浪漫通りを抜けると、川越のシンボル、時の鐘が高々と見えてきます。これは1日4回鐘の音を鳴らすそうです。路地を出るとロマンチックな蔵造りの店がつづくメインストリート、江戸との交流がさかんだった往時を偲ばせる街並み、大正時代のレトロなお洒落な店々、サツマイモ菓子が並ぶ駄菓子屋横丁など江戸情緒を満喫しながらのんびり歩きを楽しみました。

小江戸、川越は人情味厚い江戸の気質もうかがわれ、まさに伝統文化が漂う街の重みを感じるところでした。

午後3時、東久留米駅で満足して散会しました。

次年度も女性サークル部会として楽しいプランを立て、さらに多くの方たちとご一緒できたらと思います。（棚野愛子）

川越で江戸情緒を楽しむ

散策山歩き部会
天覧山・多峰主山ハイク

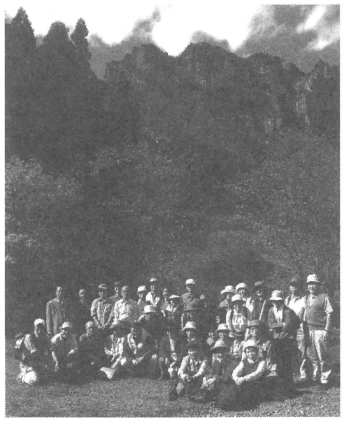
4月6日(土)、幸いにも好天に恵まれ、参加者16名飯能駅から桜花の残る天覧山へ向かう。途中、観音寺で新たに参加された方の紹介を行い、準備体操で体をほぐす。山道に入る前、戊辰戦争の折、上野彰義隊から流れたグループの本営の置かれた古刹、能仁寺に立ち寄り往時を偲ぶ。境内の手入れが行き届き気持ちが良い。中腹の広場で小休止の後、十六羅漢像が置かれている道を通り、少々岩登りの気分を味わいながら山頂に至る。展望台からの奥多摩、奥武蔵の山々の眺めがすばらしい。山頂の裏側から下り、湿地帯を経て尾根道を登り返し、多峰主山頂に立つ＝**写真**。

昼食と好展望を楽しんだ後、下りの急坂で足元をかばいながら雑木林のなかを慎重に下る。吾妻渓谷で清流の名栗川を渡り、最終目的地の飯能河原に向かう。

河畔にあるグルメ部会会長、神田さんお奨めの「榛庵」で名物のそばで舌鼓を打ち、ビール、お酒でしばし至福の時を過ごす。楽しい1日だった。（川上昇一）

グルメ部会
山歩き部会と共催バスツアー

散策・山歩き部会とグルメ部会の共催による日帰りバスツアーが初めて実現した。10月10日(木)、絶好の日和に恵まれ朝8時、参加者39名が大型バスで東久留米駅を出発。途中、榛名富士、男体山、浅間山などの秀麗な姿を楽しむ。まずは妙義神社に参拝。野猿の群れの出迎えを受け、妙義山の奇岩を仰ぎながら「さくらの里」まで歩き、名物「上州弁当」を車座になって食す。「妙義ふれあいプラザもみじの湯」で汗を落とした後、道の駅・妙義物産センターで各人蒟蒻などお土産を仕入れ、帰途につく。車内ではビールなどを飲み、お定まりのカラオケ大会で盛り上がる。定刻の午後7時、全員無事東久留米駅に帰着した。（神田尚計）



初の共催バスツアーで妙義山へ

ゴルフ部会
ここでも女性が傑出！

春季恒例のゴルフ会が4月4日(木)に開催。参加者14名は吹き荒れる強風に果敢に立ち向かいながらのプレー。なかでも圧巻だったのは白石さんと平山夫人。白石さんは強風を完全に味方につけて快調、後半は40の好スコアー。平山夫人は持ち前の長打力を発揮してドラコンを取り、並み居る男性の度肝を抜きました。プレー終了後は西武秩父駅近くのチャンコ料理店で打ち上げを行った。（帆角信美）

太極拳部会

心と体、呼吸で一つに

1月11日に晴れやかな笑顔で新春の初稽古を堪能し、その後、恒例の新年会＝**写真**＝を楽しく賑やかに開催しました。

ストレス解消、そして高齢化社会を快適に過ごすための健康法は「太極拳」と確信し、「明るく、楽しく、仲良く」をモットーに、太極拳の奥深さに一歩一歩みんなで挑戦しております。何かにつけスピードが求められる日常にあって、心、息、動を一つにし、静かに、ゆっくり、柔らかく呼吸法を習得して、健康を保持したいものです。

本年も、毎週土曜日、成美教育文化会館で通常稽古のほか、花見会、紅葉会など野外稽古も多く加えてゆきたいと思います。

（船尾和三）

初稽古を終えた太極拳部会の会員

書道部会

「日々是修業」運筆に習熟、古典に学ぶ

書道部会が発足して丸5年が経過しました。石の上にも3年と申しますが部員各位が真摯な態度で練習に励んできたため書の腕前も見違えるくらいになりました。毎年慣例になった夏季合宿による錬成会も白馬、山中湖、箱根＝**写真**＝と回をかさねるにしたがい一層充実したものになってきました。が、その都度反省することも多々ありますので、もう一度初心にかえって書を勉強したいと思います。

書は視覚芸術であり、「書は心の画」といわれています。これは書いた人の心が画になって表れ、その人柄が出るともいわれています。

したがってやはり「日々是修業」という心がけが一番大切です。このことを肝に銘じながら本年度も次の点を目標にして頑張ってゆく所存です。

○第一は基本点画の書き方をしっかり学ぶこと。書を美しく書くには運筆（起筆、送筆、収筆）に習熟しなければなりません。永遠なる課題です。

○第二は古典をしっかり学ぶこと。古典を学ぶことは書の技法を知り、鑑賞力を養い、表現力の向上につながります。古典の美しい書体、書風を忠実に臨書することが大事です。

○第三は臨書から創作への挑戦。書は自分勝手に書いて「これが創作です」というわけにはいきません。しっかりと基本に忠実に、一歩一歩積み上げていくしかないと思います。

○第四は実用書道を学ぶこと。日常頻繁に使用する実用書を学びながら書に親しみを覚えることです。特に楷書では書を通じて「般若心経」を学び「般若心経」を通じて書を学ぶという工夫も一策かと思います。（武藤　豊）

囲碁部会

西東京稲門会と対戦

当部会は現在部会員16名（内、有段者9名）。毎月1回、第4日曜日の午後、例会を開いている。当日は自由対局が主で、ほかに校友の棋院指導員による指導碁会も行われる。また昨年から点数制の手合割りを導入、従来の1段級差1子よりキメ細かい、しかも刺激の多い制度となった。

毎年1回の合宿では、囲碁大会を開いて日ごろの研鑽を競い合っているが、昨年は11月下旬日立市河原子町の海辺の宿「ホテル静台荘」にて開催。夕食には地元のあんこう鍋を囲み酒も話もおおいに弾んだ。

12月の例会後、「菜々」にて忘年会を開き、にぎやかに1年を締めくくった。

対外活動では、7月に西東京稲門会囲碁部と初めて接触。今年こそは、すでに親交のあった東村山を含めた三地区連合の碁会を実現したいと考えている。

また9月末には「第2回オール早稲田囲碁祭」＝**写真**＝が日本棋院市ヶ谷本院で200名を越える校友を集め盛大に開催され、当部会からも一昨年同様2チーム、10名が参加した。

（辰巳徳蔵）

近況・催況

◆会員編

この欄は、会員の皆さんがそれぞれ過去1年間の活動を「短信」の形でご報告し合う〝小さな広場〟です。

今回は、昨年夏と今年1月にお寄せいただいたものを中心に、順不同で掲載いたしました。

◆昨夏、アルプス涸沢岳めざすも、6月坐骨神経痛で挫折。捲土重来を期し筋トレに励もうと思う。合間に俳句の吟行にも精を出した―橘正治（昭29文）◆早稲田大学は定年退職し名誉教授となり現在、名古屋経済大学副学長。大学院で金、土曜に講義をしております。また弁護士の仕事もしています―酒巻俊雄（顧問）◆昨年入会しました新人です。幹事の方々、ご苦労さまです―川瀬晃（昭42理工）◆少年サッカーの会を私が主催しています―大矢真弘（昭54文）◆勤務先が横浜・桜木町のため毎日片道2時間かけて通勤しております。ウィークデーのゴルフは年次休暇をとることが結構難しく、ここ欠席続きで申し訳なく思っております―別処尚志（昭46商）

◎会員の出版案内　☆『職務経歴者・履歴書』の書き方」―酒井正敏（昭56文）☆『食品表示』を見分けるための本」―吉田利宏（昭62法）☆「挑戦！しなやかに」―館雅子☆「近代イギリスの自由と歴史」「ヨーロッパの光の中で」―栄田卓弘（名誉教授）

平成15年度 事業計画（案）

一、組織、財政基盤の強化
☆新会員の増加を図る
☆ポストマン制度の更なる継続実行
☆新企画の開発と実施
一、文化活動の推進
☆東久留米雑学塾の講演会
☆映画鑑賞会の開催
☆講演会と映画会による市への文化的貢献
一、広報活動の充実
☆ホームページの内外への情報の発信
☆「東稲ニュース」の活用
☆「杜の西北」紙面の多様化と特集記事
一、大学との協力関係
☆125周年募金の推進
☆大学行事への参加

平成十四年度 事業報告

【行　事】
▼1・19新年宴会、成美会館。参加者48名。▼4・21第8回定時総会。来賓、会員出席者総数78名。講演会は講師早大榎本隆司名誉教授。▼役員会。2、4、6、8、10、12月の年6回開催。▼9・1納涼会、ハワイアンバンド演奏、参加者57名。▼東久留米雑学塾の講演会2、4、6、8、10、12月の年6回開催。▼6・1早・慶戦観戦会参加者11名。早大6シーズンぶりに優勝。▼10・10妙義山麓日帰りバスツアー参加者39名。▼11・9第一回16ミリ映写会「鉄道員」。▼大学への募金5・7弐拾万壱百五十円。10・22参拾万四千円。

【広　報】
▼「東稲ニュース」年5回、2、4、6、8、10月発行。▼「会員名簿」7月発行、会員162名。▼会報「杜の西北」第8号3月21日発行。▼ホームページ2001年11月開設。

【サークル活動】
▼女性サークル部会。隔月集会。11・15川越ぶらり散策会。▼ゴルフ部会。4・4廣済堂埼玉G・C、参加14名。▼山歩き部会。4・6天覧山・多峰主山ハイキング参加16名。▼俳句部会。隔月句会、吟行龍王峡、参加15名。▼書道部会。毎月第2日曜書道会。9・7錬成会、箱根参加15名。▼囲碁部会。毎月碁会。囲碁合宿、日立市参加10名。▼太極拳部会。毎週土曜日演技会。▼グルメ部会。2・23手打ちそば「季彩すず木」参加16名。6・29イタリヤ料理「イル・カバロビアンコ」参加14名。▼郷土研究部会10・27東久留米七福神巡り参加15名。▼カラオケ部会3・1スナック「緒暮路」で開催、参加10名。

【近隣稲門会との交流】
☆5・12西東京稲門会総会。☆10・19三多摩稲門連合会長会・大会☆10・26清瀬稲門会総会。☆11・17東村山稲門会総会。☆12・7小平稲門会総会。

平成14年度東久留米稲門会収支決算書
（自平成14年1月1日至平成14年12月31日）

支出の部 科目	金額	収入の部 科目	金額
総会費	360,582	総会収入	
通信費	128,565	(73名×5,000)	359,000
印刷費	63,745	年会費	
消耗品費	58,848	(162名×3,000)	486,000
交際費	45,000	祝金	20,000
部会補助金	65,000	校友会補助金	104,000
『杜の西北』		広告収入	23,000
印刷費	134,400	利息	16
ホームページ	30,000	雑収入	140,199
イベント		前期繰越金	163,792
補助金	23,795		
寄付金(大学)	30,630		
修繕費	12,675		
繰越金	342,767		
合計	1,296,007	合計	1,296,007

早稲田の碩学を語る
栄田名誉教授が講演
3月30日、成美会館で

今年、当稲門会の定時総会は3月30日（日）に開かれますが、当日、総会に先立ち行われる恒例の講演会には、早稲田大学名誉教授、栄田卓弘先生が講師としてご登壇くださいます。演題は「反骨の言論人 浮田和民―早稲田大学草創期の巨人―」。

栄田先生は欧州史専攻ですが、第一高等学院以来、数年の例外を除いて半世紀以上早稲田のキャンパスで生きてこられた人。母校に対する格別深い愛着をもって政治学者「浮田」を語っていただくことになります。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

講演会は午後2時から東久留米市東本町の成美教育文化会館で。市民の来場歓迎。入場無料。

事務局だより

●新しい事務局になって1年になりました。気持ちだけが空回りした1年だったような気がしてなりません。これからはじっくり腰を落ち着けて会の運営に取り組んでまいります。皆様のご協力をお願い致します。

●東久留米雑学塾の講師を募集しております。ボランティア、文化、スポーツ、趣味、得がたい体験など何でも結構です。事務局にご連絡ください。

ポケットバーク

▼この「杜の西北」9号の編集の関連で、早稲田大学本部棟・2階の広報室を訪ねた。ドアを開けて入ると、正面奥でA嬢が遅い昼食をとっていたが、パッと箸を置いて私のそばに。また右からB嬢、左からC嬢。用件を告げるとB嬢が「その件でしたら秘書課が担当になります。ただいま確認いたしますので少々お待ちくださいますか」といい、小走りで電話台へ▼手持ち無沙汰になった私を、残る2嬢が相手をしてくれる。30秒もせず戻ってきたB嬢は「秘書課で資料を用意してお待ちしております。どうぞ8階にお越しください」。丁寧に謝意を述べて広報室を出ると、後ろからC嬢がついてきた。エレベーターまで送ってくれ、そのドアが閉まり切るまで深々とお辞儀▼8階では男性職員が、なるほど資料を手に私を待っていた。「ご用ずみの節はお返しください」といい、返送先のメモも入った封筒を渡してくれた。▼本部棟に入って5分も経たず、私は本部棟の正面出口に立っていた。〝省時間〟というか、〝広報のカンバン方式〟というか、寸秒を惜しむ、その即応ぶりには、一種、凄みさえ感じた。▼最近、時間勝負が仕事の各メディアが盛んに早稲田の記事を書く理由の一端が分かるような気がしたし、早稲田の底力とでもいうものを思い知った▼昨年「東稲ニュース」7号に、私は「総長が〝広告塔〟になるなど、大学本部が強い意思をもって広報戦略を展開している」といった推測文を寄稿したが、今度の経験でこれがまさに的中していることを実感した。霞ヶ関の官庁も、全国の大企業も、早稲田の広報を見習ったらいいと思う。（國）

「杜の西北」第9号
2003年3月　発行
発行人・高橋　勤
編集人・國米家己三
編集委員・大川洋子　河村洋子　棚野愛子　比護喜一郎　菱山房子　松崎　博　山岡恭子
題字・武藤　豊
事務局長・帆角信美　75・5897
印刷所・清文堂　74・1787